

ロシアにおける J. ウォーカー, C. クレアモント, および G. ボロー —ロシア・イギリス文化交流史の一側面—

白 倉 克 文

基礎教育課程

On the Lives and Writings of J. Walker, C. Clairmont, and G. Borrow in Russia —An Insight into the History of Cultural Relations between Russia and England—

Katufumi SHIRAKURA

Division of the Fundamentals of Arts

はじめに

18世紀から19世紀にかけてのロシアに異色ある3人のイギリス人が滞在し、興味深い記録を残している。1人は銅版画家ジェームス・ウォーカー（ロシア滞在1784-1802年）。2人目は家庭教師としてロシアに移り住んだクレア・クレアモント（同1823-1828年）。彼女はまだ20代であるが、バイロン、シェリーなどのロマン主義文学者との間に特別な過去を持つ女性であった。3人目はジョージ・ボロー（同1833-1835年）で、後にジブシー文学の大成者として名を残した。彼らの滞在時期はエカチェリーナII世の時代の後期から、パーヴェルI世、アレクサンドルI世を経て、ニコライI世の時代の前期にかけての時期であって、帝制ロシアの一つの最盛期を形成する期間であった。これら3人のイギリス人は立場と信条を著しく異にするのであるが、彼らがロシアで味わった生活体験を、各々が残した記録を通して吟味することによって、当時のロシア社会の特徴を多少なりとも把握することができ、またロシア体験が彼らに与えた力強い感動に触れることができる。

I. ジェームス・ウォーカー

1

ジェームス・ウォーカーはロシアからイギリスに帰還して20年近く経た1821年にアネクドート集『パラミシア』*PARAMYTHIA* をロンドンで刊行した。当時のロシアを活写した貴重な資料であるこの書が昨年、A. クロスにより復刻・刊行された¹⁾。『パラミシア』の内容を検討することがこの章の主な狙いであるが、その前に復刻者の

詳細な解説に依拠しつつ、ウォーカーの略伝を先ず記そう。

彼の生年は1760年頃、没年は1822年と推定される。メゾチント彫法の大家 V. グリーンに師事し、版画家としての活動を開始したが、1783年から1784年にかけて制作された二つの銅版画『ロシア女帝エカチェリーナII世』と『ロシア女帝の旅行馬車』とが、彼のロシア行を促したものと考えられる。

彼はロシア宮廷で恵まれた待遇を受けた。到着時に与えられた身分は女帝官房付彫刻師なるものであったが、1786年12月に、エルミターージュ美術館所蔵の G. レーニ作『幼児キリストを抱く聖シモン』を銅版画にした功により、美術アカデミー準会員に選ばれた。1794年9月には正会員の、さらに1ヶ月後には評議員の地位を獲得した。1802年に退官して帰国する時にはアレクサンドルI世から年金を恵与されている。およそ17年間に及ぶロシア滞在は、芸術家としてのウォーカーにとってきわめて恵まれたものであったと想像される。

宮廷での彼の仕事の一つはエルミターージュ所蔵の名画を銅版印刷することであった。彼が扱ったものの中にはレンブラント、P. バトーニ、J. レノルズなど著名な画家の作品が含まれている。しかし彼の名声を高めたもう一つの仕事は、同時代のロシアの著名人の肖像画を制作することであった。3人の皇帝をはじめとして、政治家 G. ポチョムキン、A. ベズボロトコ、豪商 A. ストローガノフ、作家 A. スマローコフら、各界を代表する人物が、M. シバーノフ、D. レヴィツキー、V. ボロヴィコフスキー、A. ロセンコら、当代ロシアの最高の画家たちによる肖像画を原画として、ウォーカーによって銅版画

に描き直された。こうして彼は画業を通じて、当時のロシアの一般の人々と親しく接する機会を持ったわけである。

イギリスへの帰路、彼は全ての銅版を海上で失う不幸に襲われた。そのこともあってか、彼の銅版の数はイギリス国内ではきめて少なく、現在91点の作品が彼の手になるものとして確認されている(187-192)²⁾。

ウォーカーとロシアとの係わりはおおよそ以上であるが、彼はイギリスに帰国後も様々な活動を続け、その中の一つに『パラミシア』の執筆・刊行があった。それは、「ロシアの宮廷での長期滞在中に主として集められた・・・オリジナルなアネクドット集」との副題を持つように、著者の体験のアネクドット風回顧録とでも言うべきものであって、当時のロシアに関する興味深いエピソードが多々紹介されている。帰還後20年近くを経てこの書を刊行した事実は、ロシア時代への彼の懐旧の念がいかに強かったかを示している。歲月という濾過器を経ているが故に、76編から成るこのアネクドット集は私情や主観が薄められ、客観性が優れたロシア論となっている。それはまた、イギリス人に固有のウィットとヒューモアに満ちた比較文化論ともなっている。次にこの書の内容を、その特徴を列記しつつ、検討してみよう。

2

エカチェリーナ女帝とはその死に至るまでの10年余を身近に接してきたこともあって、彼女に関する記述がひとときわ生彩を放っている。「豪華な宮廷のまん中で自分の人生の多くの年月を過ごしつつ、真に偉大で優しい女帝と毎日のように会話をし、内密のお話を承ったことは、私だけに与えられた幸運でありました。」(28)「序」に述べられたこの文章は、エカチェリーナの思い出を語ることが執筆の一つの大きな動機であったことを示している。彼女は質的にも量的にもこのアネクドット集のヒロインであり、彼女には最大限の賛辞が捧げられている。長年世話を受けた身であっても、ロシアを離れて時がたち、彼女がすでに歴史上の人物になっていた時に執筆されたものであることを考えれば、女帝へのウォーカーのこうした賞賛は、女帝への彼の素直な敬愛から出たものであったと想像される。次の引用はやや長くなるけれども、啓蒙君主としてすでに内外に名声を博し、芸術作品の収集に熱心で、今日のエルミタージュ美術館の基礎を築いたとされる女帝の人間像を見事に描いている。「君主が賢明で分別ある公法により公共の福祉と安寧を促進する国は、それが専制政治下であればなおのこと、幸いである。……そこでは学ぶためのあらゆる施設が供給され、また、金銭その他の贈物をしばしば報酬として与えることによって、各人に秘められた野心と競争心の火花が点

火せしめられる。存命中の才能ある人々へのエカチェリーナの援助と奨励のカタログを集めたならば、幾冊もの書物が満載となるだろう。それは彼女が個人的に知っていた人々、もしくは彼女の帝国を訪問した人々だけにとどまらず、全ての文明諸国に及んだ。彼女の大臣や外交官は外国の宮廷に滞在中、しばしば白紙委任状(*carte blanche*)を与えられて、絵画、彫像、宝石、書籍、模型、要するに、有名な現役芸術家たちによるありとあらゆる珍しいもの、有益なもの、または興味深いものの見本を、注文したり買ったりすることが許された。こうした芸術家には、その作品に対して気前よく時宜を逸せず支払いがなされたばかりではない。高価な贈物が、そして彼女自身の手になる極めて心のこもった見事な手紙が、実際に数知れず与えられた。」(104)

エカチェリーナに関しては、こうした賛辞だけではなく、彼女の性格や生活ぶりをありのままに表現した記述も数多い。数人いたとされる寵臣との係わりを表すエピソード(XX)³⁾、孫たちの教育方法に戸惑う家庭人としての姿を示す描写(LIX)、死に至る病に彼女を導いたとされる、孫娘アレクサンドラ・パーヴロヴナとスウェーデン王グスタヴ・アドルフとの間の破談に終わった婚姻話(V)を初めとして、周囲の人々を窮地から救った彼女の配慮と機知とに関する逸話が幾つも収められている。

エカチェリーナに関する敬意あふるる記述とは対照的に、彼女の後継者パーヴェルI世についての描写は極めて辛辣である。「何にも増して下劣で残酷で不公正なことは、社会的地位の高い人が自分の高位を悪用して、報復がありえないと知りつつ、目下の者に無礼な行為を施す事である。」(40)ウォーカーは彼自身がパーヴェルから受けた屈辱的な体験を回顧しつつ、憤りを込めてこのように記す。また、パーヴェルによって矢継ぎ早に発布された規則や条例がもたらした混乱、ことに服装規制と首都外出禁止令とが人々に生じせしめた様々な悲喜劇を、彼はコミカルな筆致で描写している(XXII, XXXI, LIV)。人間としてのパーヴェルの魅力を列記することも忘れないウォーカーではあったが、彼のパーヴェル観は次の表現に言い尽くされているように思われる。「彼は自分の欠陥を制御することができない人であったと私は思う。彼の精神構造の中には明らかに若干の狂気じみたものがあったのだ。事実彼は自分自身の統御者ではなかった、もしくは、スコットランド人の表現を借りれば、彼は自分の帽子の中に蜂を飼っていた。」(77)2人の皇帝についての彼の感想と評価は、宮廷に実際に仕えていた外国人の目を通しての観察に基づくものだけに、強い説得力を覚えさせる。

3

『パラミシア』には、当時の有名人で現在なお歴史に名をとどめる人物が少なからず登場し、それぞれの人間像が生き生きと表現されている。たとえば、エカチェリーナ時代の高官で大黒屋光太夫の恩人の1人でもあるA. A. ベズボロトコとは、その自画像を制作する過程で親しく接触する機会を持った。芸術品の収集に熱心で、自分の名前が冠せられた美術館を創設する夢を抱きつつも、尚早の死によってその夢は成就しなかったとの逸話が、親しみを込めて紹介されている(116-118)。やはり光太夫と接触のあった希代の豪商で美術アカデミーの総裁、A. S. ストローガノフに関する記述も注目に値する。晩餐会に招待される機会もあって、ウォーカーは彼に特別な親しみを抱いていたらしく、彼の人間像を次のように表現する。「まさに趣味と美術の愛好家であると同時に、豊かな富、偉大なウィット、そして洗練されたマナーを備えた貴族でもあった。」⁴⁾ (92) 晩餐会で客をおおように接待する様子を描きつつ、ウォーカーは、見栄や虚飾や高慢とは無縁の、柔軟で解放的なロシア貴族の典型として、ストローガノフを登場させる。すなわちここでストローガノフはイギリス貴族に対比する存在として描かれているのである。ウォーカーにとって母国の世襲貴族は、「他国の貴族よりも外観は近づきがたく傲慢であり、話ぶりは冷たくよそよそしい」(91)姿として映るのであって、彼は意図的にロシアの貴族を対比させることによって、先進国たる母国の貴族を批判にさらしたのである。

内外の画家に関するエピソードも『パラミシア』には散りばめられているが、それらには同業者にしか知り得ない内輪話が含まれていて、興味をひかれる。たとえば、農奴出身の異色画家で後にエカチェリーナの肖像画を残したことで知られるM. シバノフは、「大酒飲みのロシア画家」(66)として登場し、アルコールを避けるために、仕事中は部屋に監禁されねばならなかった。ロイヤル・アカデミーの初代院長で当時のイギリス画壇の重鎮であったJ. レノルズについては、エカチェリーナが彼の作品を初めて目の前にした時の様子が描かれている。エカチェリーナからの依頼によってレノルズは『蛇を殺す幼児ヘラクレス』を完成し、ロシアに送る。彼女は彼の画才と文才を高く評価していたが、この絵に関しては、エルミターージュに掲げられた実物を前にして、画材といい内容といい、さほど気に入らなかった。彼女から感想を求められたG. F. ドワイヤンも厳しい寸評をもって返答した(146-147)。

ところでこのドワイヤンについてであるが、ウォーカー自身が、「フランス・アカデミーの会員で、かの有名な

ダヴィッドがその下で学んだことのある」(103)画家、と言う説明を与えているように、彼はロシアに渡る前に、既にフランスで高い名声を博していた。2人は同じ宮廷に仕える親しい間柄であって、ウォーカーは彼を、「高度に洗練されたヴェルサイユの宮廷のマナーの中で育ち、それに習熟しているので……決して困惑したりまごついたりすることがない」(75)人物、として捉え、彼のそうした人間像を表現するエピソードをいくつか紹介している。ある時エルミターージュの天井にキューピッドとプシケの絵を描いていたドワイヤンのところに、パーヴェルI世が近づいてきて、自分がプシケのモデルになろうと申し出た。ドワイヤンは驚きつつも、恭しく頭を垂れ、「皇帝の御顔のモデルが欲しいのであれば、より優るモデルは望むべくもないでしょうが、プシケのモデルとしてはご勘弁願わねばなりません」(75)と返答して、パーヴェルを大いに感激させた。パーヴェルとの間の同様のエピソードは他の箇所でも述べられており(X X II)、対応の仕方によってはシベリア送りも覚悟しなければならない危険な状況の中で、ウィットによって危険を回避し、さらには災いを福に転じさせてしまうドワイヤンの能力に、ウォーカーは心から敬服していたようである。

4

『パラミシア』においては、筆者の目が一部の特権階級の人々だけにではなく、広く庶民にも注がれていることに注目しなければならない。ウォーカーはロシアの庶民に対する見解を、日常生活における彼らとの実際の交流体験から形成していった。「ロシアの庶民はどんなに誉めても誉め足りない。……彼らは陽気で世話好きで善良である。」(74) 愚直なまでにかたくななロシア人の振舞いに時には腹を立てるウォーカーではあるが、概して彼の見方は、先進国イギリスの出身者であるにもかかわらず、ロシアの庶民に対して好意的であり、貴族を観察する場合と同様、偏見にとらわれぬ客観的な考察で貫かれている。こうした考察は次のような一風変わった、両国民の比較論へと導かれる。「洗練された者が少数で、大多数が自然状態にある所では、当然の帰結として全ての人に優れた行儀作法が行き渡る。ところがわが国におけるがごとく、社会の連結が余りに密な場合には、誰もが実物以上に見なされたいと思うものであって、ごく普通にイギリス人の性格と見なされるあの困惑と恥じらいの念(*mauvaise honte*)は、おそらくこのことに由来するのである。」(73) イギリス人のこうした性格に対置されて賞賛されるのは、ロシア農民に備わっていると見なされる「威厳ある確信」である。ウォーカーはまたロシア農民の間には家父長制度が有効に機能していると捉え、「彼らにあっては若く強い者が高齢者と弱者を結束して保護す

る」(85)と記す。さらに、ロシアの農村と比較しつつ、イギリスにおける救貧院等の公共福祉施設のあり方に疑問の声を投げかける。

このようにウォーカーはロシアの庶民に深い関心を寄せたが、ロシア人の生活全般に関する彼の広い知識がより鮮明に表現された文章表現として、『パラミシア』より17年も前に刊行された版画集『ロシア人のマナー、習慣、及び娯楽の絵画的表現』⁹⁾への解説がある。この版画集は、ロシアでの生活を共にした彼の養子、版画家J. A. アトキンソンとの共同出版になるもので、ロシアに関する100個のエッチングと、それらへの作品解説とから成っている。作品解説はウォーカーが1人で書いたものだが、ロシアの印象が冷めやらぬ時期に書かれたものだけあって、叙述は克明で具体的であり、しかも簡潔を極めている。内容は広範囲に及び、クロスはこの書を「エカチェリーナ大帝治下のロシア人の生活のポケット版エンサイクロペディア」(153)と評している。

この解説集の最大の特徴は、いずれの項目からもロシア人の生活に対する深い愛着が感じ取られることである。例えば、ロシアの子供の独自の遊びとして「スヴァイカ」、「バープキ」、「カチャーリ」等が紹介されるのだが、それらの描写は、まるで本人が遊びに加わったことがあるかのように観察が行き届いていて具体的である。作品の解説集であっても表面的な解説にとどまらず、ロシア人の実情を正確に詳しく伝えようとの思いに貫かれている。たとえば『バーバ、即ち老女』の項目では次のように書かれている。「ロシアの老女はとても尊敬されており、若者から厚い信頼を得ている。……予知能力を持つということで大いに敬われている者もいる。」(157) 宗教に関しても簡潔ながらも包括的な解説が与えられている。大主教の儀式用の服装が詳述され、次に修道僧・修道女の立場の変遷が歴史的に説明され、さらに、農民の間で流行っている巡礼信仰の実情が描写される。「容易に水が得られない場所には井戸が注意深く配置されており、その近くには聖人像が建てられていて、彼らは休息する前後に必ずそれに礼拝する。」(177) 輸送手段についての解説も細かく、キビトカその他各種の乗り物の利用法が季節毎に、また都市と田舎とに分けられて、値段も含めて紹介される。ネヴァ川の漁民を描いた次のような表現も庶民の生活を彷彿させて印象深い。「ネヴァ川に停泊するこうした船は……魚屋にとっては同時に住居であり、お店であり、魚漕である。」(185) 『村会議』の項目では、農村共同体ミールについての興味深い説明があるが、これは外国人によるミールに関する指摘の極めて古い例にあたるのではないかと思われる。このようにして、ウォーカーは本業の画業によってよりも、むしろ文

筆によって、エカチェリーナ時代のロシアの精巧な肖像画を残してくれたわけである。西からの訪問者ウォーカーの記録と、東からの漂流者、光太夫の報告とを併せ読むことによって、この時代のロシアの全体像が鮮明に浮かび上がってくるものと思われる。

5

最後に『パラミシア』の形式について一言付言しなければならない。『パラミシア』は元来アネクドート集であって、笑いながら楽しく読ませることがアネクドートの本来の姿である。「序」の中でウォーカーは、自分は無能無才であるが、余人に及ばぬ広い交友と珍しい旅行体験に恵まれてきた、と記し、さらに、「どこでお目にかかろうとも、ウィットと良識を識別し享受するほどの知性には恵まれている」(28)と述べる。したがってこの書はロシアを主な舞台とする笑い話集とも言える側面もあって、思わず笑いを誘われる箇所にはしばしば出くわす。通常のアネクドート集に見られる、たわいのないどたばた調の失敗談(XXXVIII, XLV)、極度の吝嗇家を主人公とする奇人談(XV)⁹⁾、当意即妙の言辞が發揮する功名話(XIII, XL)等も豊富である。

しかしウォーカーにはもう一つ別の意図があった。「単に楽しませるだけの試みを一步越えることに敢えて挑戦し、有益そうだと自分が考える提言を思い切って行い、さらに、国民性、その欠陥や特殊性についてある程度まで解明しようと努力した。」(29)「序」でこのように述べられていることから明らかなように、彼はロシア体験に基づいて、イギリス社会の持つ特殊性や問題点を抽出し告発しようとの意図を当初から持っていたわけである。こうした意図を達成するために、彼はこのアネクドート集に独自の形式を採用した。すなわち通常のアネクドートに相当する部分(SCRAP)の前に導入部(INTRODUCTION)を配して、この部分で自己の主張を直接的もしくは比喩的に行ったのである。こうした形式によって、この書は独特の社会批評的、比較文化論的性格を獲得することとなった。

なお『パラミシア』の末尾にはレノルズ評価に関連して、ウォーカーの美術論が掲載されている。フランス学派、イギリス学派、及びオランダ・フランドル学派のそれぞれの特徴を明らかにして、彼自身の見解・評価を示したもので、美術史的に少なからずの価値を持つものと思われる。

II. クレア・クレアモント

1

ウォーカーがロシアを去ってから約20年後、1人の若いイギリス女性が家庭教師として単身ロシアに移り住ん

だ。名前をクレア・クレアモント (1798-1879年) というが、特別な過去を持つ女性で、彼女はその後その過去を秘めつつ、およそ5年間をロシアで過ごすこととなる。

彼女の母クレアモント夫人はクレア (幼児名はジェイン) が3才の頃、ウィリアム・ゴドウィンと結婚する。彼は『政治的正義の研究』(1793年)を著した有名な急進主義の理論家で、彼の前妻は『女性の権利の擁護』(1790年)の著者として知られる女性解放思想家メアリ・ウルストンクラフトであった。クレアモント夫人は2人の連れ子チャールズとクレアを、ゴドウィンも同様に2人の連れ子ファニーとメア리를抱えての再婚で、しかも子供4人の父親が全部異なるという複雑な家族構成であった。クレアはこの複雑な、しかし文化的刺激に満ち満ちた家庭の中で養育された。義姉妹に当たるメアリは後に『フランケンシュタイン』を著した。

ゴドウィンの多くの心酔者の1人に詩人 P. B. シェリーがいた。彼は妻帯の身でありながらメアリと恋仲になり、挙げ句はクレアも巻き込んだの6週間の大陸逃避旅行を決行した。3人の奇妙な共同生活を体験しつつ、クレアは当時名声高かった G. G. バイロンと関係を持ち、女兒アレグラを出産した。しかしバイロンとの関係は深まることのないまま、アレグラが1822年4月に死亡した。同年7月にシェリーも海上での事故死で没し、クレアは精神的かつ物質的支持者を完全に失った。

自立の生活を余儀なくされたクレアは兄チャールズを頼ってウィーンに走った。英語の家庭教師として生きようとの算段であったが、メッテルニヒの反動政治の渦中であってゴドウィンやシェリーらとの関係を調査されるなど、ウィーンでの生活は難儀を極めた。こうした時彼女は N. I. ゴトフ伯爵夫人エレナ・アレクサンドロヴナと知り合う。夫人には2人の娘がおり、クレアはこの2人の家庭教師として雇われて、1823年3月22日にウィーンを離れてサンクトペテルブルグに向かう。

周囲の反対を押し切ったロシア行きであったが、この決行を促した最大の理由は呪われた過去に決別し、新たな人生を異郷に求めることであったと思われる。「私がロシアへ行ったのは、私の暗く惨い運命の訪れを忘れ、私の名前と不可分に結び付いていると思われる度重なる災難を忘れるためでした。」¹⁾ フィレンツェ時代にロシア人との間に広い交友関係を保っていたことも彼女の決意を促したかもしれない²⁾、また、当時ロシアで英語が人気を得ており、イギリス人の家庭教師が増えつつあるという情報も彼女の耳に入っていたかもしれない³⁾。

クレアの風貌については、フィレンツェ時代の彼女について、ある作家が次のような記述を残している。「彼女はブリューネットでもとても黒っぽい目と髪をしており、

知性に輝いていた。……端正な美貌で際だっていたわけではないが、生き生きして魅力的であり、社交性を備えていた。」⁴⁾ シェリー、バイロンとの関係を除いても、作家 T. L. ピーコックや E. J. トレローニから求婚される体験を持っており、艶聞には事欠かなかった。また義姉妹メアリ・シェリーとの間には緊密な援助関係がほとんど終始保たれていた。ロシアに到着した時には20代半ばの若さであったが、しかしこの女性はゴドウィン、シェリーらの感化をまともに受けつつ成長した、ロマン主義と自由主義の精神の申し子のような女性であった。もう一つ特記すべきことに、彼女は並外れて高い素養を身につけていた。語学の才に恵まれ、英語の他にフランス語、イタリア語、ドイツ語に習熟していた。文学を好み、シェリーにも学ぶことにより、その知識は広く深かった。創作も手掛け、バイロンとの関係も自分の習作を彼に郵送したことに端を発していた。さらに音楽への関心が強く、声楽とピアノを様々な機会を利用して学び続け、既に高い技術を身につけていた⁵⁾。

2

ロシアにおけるクレアの足跡をたどる資料としては、彼女自身の日記と手紙の他に、メアリ・シェリーが残した記録などがある。これらの資料によって、彼女が滞在した家庭の状況、そこでの生活ぶりがある程度確認できる。最初の家庭は1823年春以降に滞在したサンクトペテルブルグのゴトフ伯爵家であり、次女エリザヴェータへの教育が主な仕事であった。後にワルシャワ総督夫人となったエリザヴェータとはその後も長らく連絡を保っており、クレアが最初の教え子に深く慕われたことを証明している。1824年の春からは、モスクワの Z. H. ポスニコフ家に住み着いた。この家での滞在は優雅な別荘生活があったり、教養豊かな家庭教師仲間に恵まれるなどで、5年間で最も幸せな期間であったが、教え子の女兒を病気で失う不幸に見舞われて、あっけない終結を迎えた。1826年の春頃から、モスクワのトヴェリ通りの P. A. ゴリツィン家に移り住む。封建的な気風の色濃いこの家で彼女は奴隷もどきの生活を強いられ、子供の教育に悪戦苦闘する。自分の過去の経歴が知られぬように腐心しなければならぬ日々でもあった。「ここに滞在するときと1・2年で死ぬだろう」⁶⁾という悲惨な状況の中で、ロシアからの脱出を考えるに至る。旅費を支払うことなく西ヨーロッパに帰る手だてを求めている時に知遇を得たのが P. S. カイサロフ家であった。1828年の春にクレアはこの家族と共にロシアを後にした。

以上がロシアにおけるクレアの生活の大まかな足跡であるが、孤立無援で異郷に生きる彼女にとって、糧を得る唯一の手段は家庭教師としての仕事であった。滞在家

庭での子供の養育全般に携わること以外に、求めに応じてあちらこちらの家庭に出張して教えもした。英語教育が中心であったが、他の語学や音楽に関する彼女の知識も大いに役立つことがあった。一体彼女はどのような状況の中で、どのような方針で教育を施し、どのような結果を得たのであろうか。彼女の日記と手紙を手がかりに、先ずこの問題を考察してみよう。

家庭教師としてのクレアの評判は悪くなかったものと想像される。「間もなく私は大変な評判を獲得しました。何を試みても、私の生徒たち全員が他の人たちの生徒よりもはるかに進歩を遂げたからです。」⁷⁾これは友人宛の手紙に記した自画自賛ではあるが、あながち誇張ではなかったと思われる。頼れる人が1人もいない地にあって、女の身一つで5年間にわたり家庭教師として生き抜くことは、ある程度の好ましい評判無しには不可能であったろうと考えられるからである。教育に対する彼女の基本的な考え方が、メアリ・シェリー宛の手紙の中に示されている。周囲のロシア人の教育方針を批判しつつ、次のように記す。「彼らは外側から内側に作用させることによって子供を教育しますが、これは実は猿に適した教育に他ならず、単なる模倣の体系です。私は内側が外側に作用することを望みます。すなわち、私の女生徒ができる限り自由にされること、彼女自身の理性が彼女の行動の推進力となることを望みます。」⁸⁾クレアが、子供の持つ潜在能力の開発を最重要視した啓蒙主義・ロマン主義に固有の教育観を実践しようとしていたことが、この文章によって明かである。

こうした方針に基づくクレアの教育は最初の家庭であるゾトフ家では成功したようである。数歳しか年齢の違わなかった教え子エリザヴェータは、モスクワに住むクレアを後にわざわざ母親と一緒に訪ねているし、結婚後も連絡を取るなどして、クレアへの敬愛の念を示している。次の家庭ポスニコフ家でも彼女は自分の方針で伸び伸びと教えることができた。幼い女兒ドゥーニャを相手に紙人形の作り方を教えたり、庭の一隅に種子を蒔いて植物の生長を観察したり、物語や歌の書物をロンドンから取り寄せて英語を学ばせたりした。他の家庭教師たち共々、戸外での遊びに子供と一緒に興じることもあった。

しかしドゥーニャが5歳で死んで、クレアがポスニコフ家にとって不要な存在になってから、彼女にとっての苦しみが始まった。この家は様々な思想の人々が自由に出入りする、サロン風の雰囲気を持つ解放的な家庭であったが、新たに住み着いたゴリツィン家は正反対の家風を帯びていた。彼女はここで自分の教育観と、ロシアの伝統的家庭教育との間の極端な隔たりに驚愕し、煩悶することとなる。この家では夫婦が共に厳しく、子供たち

は些細なことで鞭打ちを受けた。「全てが罪なのです。彼女らは跳ねることも走ることも笑うこともできません。もう2カ月も彼女らは家から外に出ておらず、彼女らが楽しめる唯一のことは、食べ飲み眠ることです。」⁹⁾「子供たちがこんなにも恐ろしく、または意地悪くなれるなんて、私は思ったこともありませんでした。彼女らは騒々しい喧嘩をやめることがありません。朝から晩まで口喧嘩や取っ組み合いです。」¹⁰⁾ゴリツィン家の6人の子供のうち、クレアは主として3人の女子の養育に携わっていたが、彼女らを観察しての感想を以上のように述懐している。彼女の優しさに付け込んで、ありとあらゆる悪態を示す子供たちに、彼女は怒りよりもむしろ同情を覚える。「私は本気で彼女らに腹を立てることができません。彼女らが受けている教育で他にどう変わりようがあるのか、わからないからです。」¹¹⁾強制を排し、子供の内発性を自由に発揮させることを理想とするクレアにとって、ゴリツィン家における家庭教師としての生活は、強烈な異文化体験であったと考えられる。

この家庭におけるクレア自身の立場も惨めなものであった。「私は3人の子供を受け持ち、彼女らに何もかも教えねばなりません。朝8時から夜10時半まで、1秒も私の時間はありません。……私は全く疲れ切って、着替えもせずにベッドに身を投げ出すことがよくあります。」¹²⁾この時代の女性家庭教師の不安定で悲惨な立場はクレアの祖国イギリスでのそれが喧伝されてきたが、彼女はロシアのゴリツィン家においてその悲惨を存分に味わったわけである。

3

イギリス女性、しかも多くの特殊な体験を味わい、特定の思想傾向を帯びている女性にとって、新天地ロシアにおける生活は、様々な感動をともなった。「少なくとも週に一度はスチームバスを使うことがあらゆる階級のロシア人の習慣である。」¹³⁾ジェイムス・ウォーカーは20年程前にこう記したが、クレアも入浴体験の快さを日記に綴っている。「1時入浴。ここで私はとても幸せだった。快い水の暖かみに横たわり、樹間をそよぐ風音に一人聞き入る……まるで自然の懐に頭を乗せて、その心臓の鼓動とその胸の吐息を聞いていたかのようだった。」¹⁴⁾こうした感慨はロシアの豊かな自然を前にしてのありのままの感動の発露であったろうが、同時に、自然との一体化を希求したイギリスロマン派の自然観を反映したものとも考えられる。「悲哀ははかない青春の盛りを消滅せしめた。そして人生はすべて苦悩と闘争の修羅場だった。しかし今私は自分の魂を周囲の全てに委ねよう。……私は敢えて自然を慰安者と見なそう」¹⁵⁾

クレアの日記にはロシアの歴史や社会現象に関する記

述も含まれている。ロシアの軍隊に対する捉え方は、同じイギリス人でありながら、ウォーカーとは対照的である。彼はロシアの兵士を次のように賞賛した。「沈着かつ果敢な勇気を持ち……服務に忠実、行動において冷静にして従順、極度の疲労に耐え、最たる粗食でも生きられる、要するに極めて優れた軍隊。」¹⁶⁾クレアが残したのは全く別の観点からの観察であった。「これら軍隊の死亡率は過労と栄養失調とにより驚異的である。少なくとも100人に10人、時には15人が死亡するが、これは戦時中におけると同じ程度の高い死亡率である。」¹⁷⁾同じ日の日記には農奴の起源についての興味深い歴史的考察もあり、彼女が様々な人々との対話を通じてロシアの社会事象に関する情報を集め、自分なりに判断しようと努めていたことが明かである。

1825年12月14日にサンクトペテルブルグで勃発したデカブリストの乱はクレアのロシア滞在中の最大の事件であったが、彼女はこの事件に関して少々ではあるが、記録を残している。モスクワのポスニコフ家に住んでいたために、情報の把握に遅滞が見られるが、事件に関する日記記載はおおよそ以下のものである。11月29日、タガンログでのアレクサンドルI世の死亡に関する噂の記載。12月2日、同帝が弟ニコライを後継者に指名する遺書を残した旨の記載。同17日、兄（コンスタンチン）の権利放棄及び自らの即位を宣言するニコライの勅令が出されたとの記載。翌18日、「ペテルブルグから悪い情報が届いた。そこでは兵士がニコライの即位に強く反抗した」¹⁸⁾との記載。また、ポスニコフ夫人がニコライをローマ皇帝ネロになぞらえつつ、その悪政への恐れを述べた旨の記載。20日、「様々な人々が逮捕された」¹⁹⁾との記載。彼女の日記は翌年1月2日をもって中断しており、ロシアの政情に関する次の彼女の報告は、5月2日付けのメアリ・シェリー宛の手紙に移る。「当地での政治的展望は風雲急を告げています。6カ月間支配した恐怖政治はとどまることを知りません。逮捕投獄は数知れず、しかもすべてロシアの若者の鑑となる人々ばかりなのです。」²⁰⁾

デカブリストの乱に関するクレアの記載はこのようにごく控え目であるが、しかし外国人家庭教師の身である彼女にこれだけの情報が得られたのは、彼女が当時まだポスニコフ家に居を持っていたからであった。ここは進歩的な思想を抱いた人々の集うサロンであって、その中の1人に乱に参加してシベリアに流刑されたI.I. プーチンがいた。詩人プーシキンの親友としても知られる彼の名前は一度ならずクレアの日記に現れるが、12月5日の日記には「プーチン氏来訪す」²¹⁾と記されている。この直後彼は決起に参加するためモスクワを去った。ポスニコフ家に居住していたこともあって、「ロシアの若者の

鑑」たる乱の関係者をプーチン以外にも知っていた可能性が、彼女には強く残されている。²²⁾

ロシア滞在の後半、すなわちデカブリストの乱以降は、クレアは周囲の思想的雰囲気との間に極端な違和感を覚えるようになる。「私が神聖なものを見なしていた主張は人類の他の人々には呪いの対象でした。私がいとおしみ崇敬した人々は、名前が挙げられるといつも蔑みと非難の対象でした。」²³⁾彼女のこうした思想的違和感は、イギリスとロシアとの国情の違いに関係があったろうし、また、革命の高揚期から反動的停滞期への推移という歴史的状况とも関連があったものと思われる。

この頃彼女は自分の過去が周囲に知られないように、細心の注意を払わねばならなかった。ところがあるイギリス女性がロンドンを訪問して、クレアの母と対面する機会を持った時に、クレアとゴドウィン、バイロン、シェリーらとの関係をすべて聞き知ってしまった。この情報は、クレアに家庭教師の口を斡旋しようとしていたモスクワ大学教授の某イギリス人の耳にも伝わってしまった。そのときの感想を彼女は次のように手紙に記す。「私が誰であるかを聞いた時のこの人の恐怖を想像することができるでしょう。良識、嗜み、そして優雅な趣味の模範たるかわいいクレアモント嬢が、他ならぬ自由思想家たちの巣窟で育てられ、そこの出身者であったなんて。」²⁴⁾

このようにして自分の過去の人間関係に触れることを注意深く避けてきたクレアではあったが、彼女の日記にはバイロンとシェリーとに関する興味深い感想が若干記されている。1826年12月27日の日記には、バイロンを称揚しシェリーを罵倒する2人のロシア貴族の会話を耳にして、クレアが激しく立腹する様子が記されている。バイロンがシェリー未亡人、すなわちメアリ・シェリーに年金を与えたとの話を聞いて、クレアは「ああ、なんとこの嘘がこの世にあるのだろう」²⁵⁾と嘆いている。また翌年1月28日の日記には、T. メドウィン著『バイロン卿の会話日誌』を読んだ後の感想が書かれている。「ああ、なんとこの嘘があの本には含まれていることか！哀れにもシェリーは全く従属的な役を演じさせられている。」「既にベッドについてからも、私はたくさん泣いた。今日の読書によってシェリーの姿が生き生きと私の心によみがえったからだ。世界に対する彼の貢献は忘れ去られ、あのペテン師バイロンが、そのペテン行為故に賛美されていると考えることはとても残酷だ。……彼は自分の娘を無知で偏屈な雇人たちの世話に委ね、注意不足で彼女を死なせてしまった。」²⁶⁾これらの記述は2人の詩人に対するクレアの本心が吐露されたものとして、また2人がロシア国内でいかに受容されていたかを示す例としても、

興味深い。

4

ロシアに来る前にクレアは文学的な教養の豊かな女性として成長し、また音楽においても声楽とピアノとに長じていた。20代後半の5年間に及ぶロシアでの生活においても、巧みに機会を捉えては自己の素養・技術に磨きをかけ、その後の波乱万丈の長い生涯に向けての基礎を築いた。当時ロシアは文化的後進国ではあったけれども、その後の大きな発展に向かっての萌芽期にあたり、貴族の館のあちこちで若い芸術家たちの活発な活動が着実に始まっていた。ロシアにおいてもクレアは優れた文化人との出会いに少なからず恵まれたのである。

文学面で最もクレアに影響を与えたのは、ドイツ人C. H. ガムプスである。同じポスニコフ家で家庭教師をしていたこの人物は文学・歴史に通暁し、自ら詩作も手掛けていた。彼はフランス語による叙事詩『モーゼ』を創作し、クレアに語り聞かせたが、この作品は後にクレアの尽力もあって、パリで出版されている。またクレアが日記の中で楽しげに詳述していることだが、家中の者がこぞって参加する家庭劇場がポスニコフ家の別荘で催され、ラシーヌ作『エステル』やガムプスの創作コメディが上演された。²⁷⁾

音楽面でクレアを指導したのはJ. J. ゲニシタであった。やはりポスニコフ家で週に一度彼女にピアノと声楽を教えていたが、彼女は彼を、「すばらしい音楽家で、男性音楽家として私の最も気に入った人」²⁸⁾と絶賛している。彼の指導によって彼女はロッシーニやベートーベンの曲を弾くことに難渋しつつも喜びを見出した。一方彼はシラーやプーシキンの詩作に自ら作曲をして聞かせてやった。彼女はゲニシタの作曲になるシラーの作品集のリサイタルを開いてもいる。彼は後に著名な音楽家となり、ベルリオーズから賞賛されることもあった。²⁹⁾

このようにしてロシアで单身生計を営まねばならぬ厳しい状況に身を置きつつも、創造的精神に溢れる若い芸術家たちと接することによって、クレアは文学と音楽への素養をさらに向上させることができた。

ロシアを去ったクレアはその後ヨーロッパ各地で波乱に満ちた人生を送り、1879年まで生き続けた。老齢期の彼女がヘンリー・ジェイムスの小説『アスパンの手紙』のヒロインのモデルとなったことはよく知られているが、ロシア時代の体験が彼女のその後の人生に果たした役割は大きかったものと思われる。

III. ジョージ・ボロー

1

クレアがロシアを去ってからおよそ5年後の1833年、

ジョージ・ボロー (1803-1881年) がサンクトペテルブルグに到着した。彼はイギリス内外聖書協会の職員で、満州語版聖書の刊行準備をするためにロシアに派遣されたのであった。

今日ボローは『スペインのジプシー』(1841年), 『ラヴェングロー』(1851年), 『ロマニ・ライ』(1857年)などの著作を通して、ジプシー研究家及びジプシー文学の確立者としてイギリス文学史に名を残している。また多数の言語に通じた言語学者としての活躍も記録に残されている。後年に開花した彼のこうした資質は幼少時の生活体験に根ざしていると考えられる。新兵徴募士官を勤めていた父に伴って、幼児より英国各地を遍歴し、また自立した後にも、放浪生活を好んで体験した。各地への移動体験を重ねる中で、ジプシー語を含む様々な言語に深い関心を示し、ことごとく習得していった。彼の文学上の指導者ウィリアム・タイラーは、20歳前の彼がすでに12の言語を理解すると、ロバート・サウジー宛の手紙に記している³⁾。1826年にはデンマーク語からの翻訳書『ロマンチックバラード集』を完成した。

彼のロシア行の機縁となったのもその言語力であった。イギリス内外聖書協会は前々からサンクトペテルブルグでの満州語版聖書の刊行を企てており、そのための人材を求めていた。そのような時ボローを個人的に知るある協会関係者が次のような文章を含む推薦状を、1832年末、協会に書き送った。「彼は大学教育を受けていない人間ですが、13の言語で聖書を読んだことのある人間です。」²⁾翌年1月に協会の面接を受け、早くもその5ヶ月後には、「私は満州語をマスターしました」³⁾と協会に伝えている。このような経過を経て彼は1833年8月13日にロシアの土を初めて踏んだ。

聖書を刊行することは雑多な業務を含んでいた。満州語を学び、聖書を翻訳すること、刊行の許可を得ること、印刷用紙を確保すること、印刷所と協議し、印刷過程を監視すること、等々。ボローは多くの煩雑な仕事を熱意をもってどうにか成し遂げ、2年余を費やして出版にこぎつけることができた。

未知の土地に暮らすことは彼の性向に合っていた。ロシア語学習にも本格的に取り組み、到着して半年後には手紙で次のように母親に伝えている。「今はロシア語でよどみなく話すことができ、書くこともどうにかできます。」⁴⁾サンクトペテルブルグの都市美の印象がよほど強かったらしく、一度ならずその感動を手紙に記した。「ロシアの首都の美と荘厳さについては予めたくさん読んだり聞いたりしていましたが、私が目目の当たりにしたものは私の想像を越えていたと告白します。ここがヨーロッパで最高の街であることは疑いようがありません。」⁵⁾2

年間の短い滞在であったが、彼はこの期間にロシアの言語、文化、習俗に深い愛着を抱き、それらを意欲的に研究した。そのことによってロシア時代は彼の後の創造的な文筆活動の出発点となったのであるが、次に聖書刊行以外の彼のロシアでの活動について調べてみよう。⁶⁾

2

1835年の春、『タルグム』*TARGUM* と題される書が、サンクトペテルブルグで刊行された。副題には『30の言語と方言からの韻文翻訳』とあるが、この書はボローのこれまでの外国語学習の集大成であった。古代ヘブライ語、アラブ語、ペルシャ語、トルコ語、タタール語、中国語、満州語、ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、フィンランド語、アングロ・サクソン語、古代スカンジナビア語、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、古代アイルランド語及びその他のケルト方言、古代及び現代ギリシャ語、プロヴァンス語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、そして最後はジブシー語から、それぞれの民族の代表的韻文作品が英語に翻訳され紹介されていた。「ある民族の特徴はその詩作品の一般的な調べによって最もよく識別される」⁷⁾と序文で述べているように、ボローの意図は、各民族を代表する韻文作品を翻訳・紹介することによって、それぞれの民族の特徴に迫ろうとすることにあった。内容は多岐にわたっており、『カレヴァラ』のような古謡から、プーシキン、ミツケヴィチなど、活躍中の若い詩人の作まで収められている。

ここで特に注目されることは、この訳詩集にプーシキンの詩作が含まれていることである。ボローはプーシキンを最も早く国外に紹介したイギリス人の1人であったと思われる。『タルグム』には叙情詩『黒いショール』及び叙事詩『ジブシー』からの一節が収められた。この訳詩集が出版された数ヶ月後に、翻訳者の記載の無い粗末な冊子が刊行された。『お守り。アレクサンドル・プーシキンの詩作品のロシア語からの翻訳』と題されるこの書もボローの訳業であって、そこには叙事詩『お守り』と『ルサルカ』とが収録されていた。

ボローによるプーシキンの詩作品の選択方法には、際だった特徴が見られる。4作品は1819年から1827年に書かれた作品で、初期のロマン主義的傾向が色濃く漂っている作品群である。後に代表作となる他の優れた諸作が刊行されてボローの目に触れる機会があったのにもかかわらず、地方色豊かでエキゾチックなこれらの作品を彼が選出したことは、彼自身の傾向を強く反映したものとと言える。ことに『ジブシー』に関しては、発表されたのはほんの一部でしかなかったが、実は不完全ながらも全体の翻訳を終了していたのであって、この詩物語に対するボローの並々ならぬ愛着を覚えさせる。

プーシキンとボローは同時期にロシアに住みつつも、直接会ったことはなかった。しかしボローは人を介して、『タルグム』と『お守り』とをプーシキンに贈呈した。そのことに対してプーシキンは次のような伝言を残した。「アレクサンドル・プーシキンは深い感謝の念を持ってボロー氏の著書を拝受致しました。個人的に彼とお会いできる名誉を持ってなかったことを心より残念に思います。」⁸⁾はるか後にプーシキンの死を伝え聞いたとき、ボローはその死を悼んで次のように手紙に記した。「悲しい心でプーシキンの死を聞き知りました。実にこれはロシアにとってだけの損失ではなく、全世界にとっての損失でもあります。」⁹⁾作品を通してのプーシキンとの接触はその後のボローの生き方に大きな影響を与え、次に見るように、モスクワジブシーとの接触を促す作用を及ぼした。

3

1835年11月ロシアを去る直前に、ボローはわざわざモスクワを訪れている。この訪問の目的はモスクワ郊外のジブシー集落に足を運ぶことであった。ジブシーへの関心はイギリス時代の古くから生まれ、ジブシー語の知識も既にある程度身につけていた。ロシアに来てからはプーシキンの著作からの影響が大きかった。この時の訪問の様子は『ロシアとスペインにおけるジブシー』と題されて、1836年にロンドンのある雑誌上で報告されたが、それは1841年刊行の単行本『ツィンカリ』に再収録されている。

ボローはモスクワから2 ヴェルスタ離れたジブシー集落マリイナ・ロシチャを数回訪れた。イギリスジブシーの言葉で挨拶すると盛大な歓迎を受けた。ロシアの歌とジブシーの歌を聞いて深い感銘を受けた彼は次のように記す。「ジブシー女性は太古より音楽の才能に優れており、ついにはその天与の才を技術によって完成の域にまで高めた……ジブシーの合唱はある意味で最高のものとみなされる。」¹⁰⁾また、歴史的な名ソプラノ歌手アンジェリカ・カタラーニとジブシー歌手ターニャについての興味深いエピソードが次のように記される。「ロシアでは誰にでも知られていることだが、有名なカタラーニがあるジブシー歌手の声を聞いて非常に驚き、法王から贈られた高価なショールを自分の肩から外して、ジブシー女性を抱擁し、自分にとって歓喜の印であるこの品を受け取るようにと促した。カタラーニは、このショールは最高の歌手として自分自身が戴いたもののだが、法王からの贈物を真に所有すべき人を今見出したのです、と語った。」¹¹⁾

スペインに赴任してからもボローはさらにジブシー研究を発展させたが、その成果として生まれたのが上述の

『ツィンカリ』と、『スペインの聖書』(1843年)とであった。ロシアジプシーに関する研究が十分でないことを感じた彼はイギリスに落ち着いてからも、ロシア在住の友人に資料の送付を頼んでいる。「ロシアジプシーの言葉にはたくさんの方の詩歌があり、それはスペインジプシーよりもよく保存されています。もしいつかロシアへもどることがあれば、私は彼らの歴史を書き、彼らの言語と歌を集めるのですが。」¹²⁾ロシア再訪は成らなかったが、ジプシー研究への熱意は生き続け、それは『ジプシー語彙集』(1874年)となって結実した。ロシア時代はボローにとってその後の本格的なジプシー研究の端緒となったわけである。

4

ロシアを離れてからもボローとロシアとの関係は終わらなかった。オランダ人の友人J. P. ハスフェルトとの文通を主な手段として、サンクトペテルブルグとの連絡は長く続けられた。任地スペインやポルトガルからの、また退職後の定住地オウルトンからの手紙の中で、ボローはしばしばロシア時代を回顧するのだが、そこには異常とも思われる程の強い懐旧の念が込められている。世話になった医者や印刷業者、かつての仕事仲間に触れつつ、次のように記す。「あの頃を思うと私の眼は潤んできます。……私の心はサンクトペテルブルグに係わる全てのことに思い焦がれているのです。」¹³⁾ロシア時代を懐かしむ一方で、彼はロシアの文学状況に関する新しい情報を求めることにも熱心であった。「次に手紙を下さるときには、忘れずにロシアの文学状況について書いて下さい。かわいそうなプーシキンに代わる人はいるでしょうか。いないでしょうね。あの様な人は毎年現れはしませんから。」¹⁴⁾彼の手紙にはまた有名無名の様々な人物名が記載されており、彼のロシア時代の交友関係を知る手がかりを与えてくれる。N. I. グレチ, P. L. シリング, N. J. ビチューリン, K. G. クリムスキー, P. V. ドベリ等、多くの言語学者、東洋学者が、過去に交際があった人物として、親しみを込めて言及されている。

後年のボローの狂おしい程のロシアへの追慕が必ずしも言葉だけの表面的なものでなかったことは、彼が晩年になってロシア民話を翻訳・刊行しようと努力していたことから伺える。1862年に彼はある雑誌に3回にわたってロシア民話—『エメリヤンの馬鹿』、『チムのお話』、『熊の耳をしたイヴァシュカのお話』—を発表した。『エメリヤンの馬鹿』の紹介文の中で、彼は次のように記す。「イギリスの読者はこの物語から、十のロシア旅行記を読むよりもはっきりと、ロシアのムジーク、即ちお百姓さんの生活の仕方や感じ方が理解できるでしょう。」¹⁵⁾雑誌に掲載された3編の民話はいずれもロシア時代に手掛

た訳に手を加えたものであることが確認されている。¹⁶⁾さらに、刊行には至らなかった他のロシア民話の試訳の存在も確認されており、ボローが民話を通じて、ロシアをイギリスに紹介しようと強く望んでいたことが明かである。彼のロシア滞在はわずか2年間であったが、彼とロシアとの係わりは生涯にわたるものであったと想像される。

おわりに

イギリスとロシアとの交流は16世紀後半に始まったとされるが、当然のことながら、主として先進国イギリスが後進国ロシアに文化的影響を及ぼす形態での交流関係が長期にわたった。こうした関係に変化が生じたのは、18世紀から19世紀へと世紀が移る頃であって、それ以降はイギリスへのロシア文化の影響という逆の流れも徐々に強まっていく。ジェームス・ウォーカー、ジョージ・ボロー、そしてクレア・クレアモントの3人が間隔をはきみつつも相次いでロシアに滞在した時期はちょうどこの転換期に当たるわけで、3人はそれぞれの方法によって、両国の相互的文化交流の流れを促進するに多少なりとも貢献したと言える¹⁷⁾。

彼らは外国人だけに感じ取られる新鮮な感動をもって、各々の立場から当時のロシア社会の諸相を観察し記録した。ウォーカーは日常の生活の中から興味深い体験談を紹介することによって、皇帝たちの人間像を描出し、新興ロシアのエネルギッシュな貴族層を活写することができた。彼はまた庶民をも視野に収めることによって、ロシア社会全体の俯瞰図を作成することに成功した。ボローはプーシキンの著作を愛し、いち早くそれらを翻訳するなどしてロシア文学を国外に紹介し、その後のロシア文学の活況を予告する役割を果たした。彼はまたロシアジプシーに自ら接し、その観察記録を残すという常人の成し得ぬ業績を残した。クレアは上述の2人とは異なっていて、ロシアを去ってからはロシアに関する記述を残さなかった¹⁸⁾。しかし滞在中に記された彼女の日記と手紙は当時のロシア社会の特徴を書き記した貴重な資料である。自由主義的傾向を強く帯びた彼女の教育方針が容認され成果を挙げた実例がある一方で、その教育方針故に苦悩し挫折する体験を彼女が持ったことは、当時のロシアの貴族層の間に、対立する様々な教育観が混在していたことを示唆している。外国人家庭教師についての彼女の詳しい記述は、当時の貴族の子弟教育において果たした外国人の役割に関して多くを語っているし、優れた若い音楽家との交流の記録は当時のロシア音楽界の新しい息吹を感じさせる。自らも楽しんで参加したボスニコフ家での家庭劇の描写は、ロシア貴族の間で前世紀後半よ

り高まっていた演劇愛好の雰囲気を生々しく伝えている¹⁹⁾。このようにして、18世紀末から19世紀前半にかけてのロシアの人々の様々な営みと文化的諸潮流とが、この3人のイギリス人の記録の中から、くっきりと浮かび上がってくるのである。

最後に目を転じてこの時期の日本とロシアとの関係に注目すると、大黒屋光太夫のロシア滞在がウォーカーの滞在期間の前半とほぼ重なり合うことに気がつく。光太夫がエカチェリーナ女帝に謁見した時にもウォーカーはどこか近くにいたはずであり、日本からのこの漂流者の噂を当然耳にしていたものと思われる。帰国した光太夫が後に『北槎聞略』としてまとめられる優れた報告を残したのにもかかわらず、それが衆目に触れること無く時が過ぎていった状況を考えるとき、日本とロシアとの交流がイギリスとロシアとのそれと較べていかに閉ざされたものであったかに、改めて気づかされる。

註

I

- 1) Anthony Cross (ed.), *Engraved in the Memory* (Oxford & Providence, 1993)
- 2) カッコ内のアラビア数字は前掲書の引用ページ数、もしくは参照すべきページ数を示す。以下同じ。
- 3) カッコ内のローマ数字は前掲書のアネクドット番号を示す。以下同じ。
- 4) この文章を大黒屋光太夫の指摘と比較すると興味深い。桂川甫周著、亀井高孝校訂『北槎聞略』(岩波文庫、1993年)、225ページを参照。
- 5) *A Picturesque Representation of the Manners, Customs, and Amusements of the Russians* 解説の抜粋が、ウォーカーの前掲書に収録されている。
- 6) 類似の奇人が光太夫の報告にも登場する。前掲『北槎聞略』、242-244ページ。

II

- 1) Marion Kingston Stocking (ed.), *The Journals of Claire Clairmont* (Cambridge, Mass., 1968), p. 437; Robert Gittings and Jo Manton, *Claire Clairmont and the Shelleys* (Oxford, 1992), p. 89.
- 2) M. P. Alekseev, *Rusko-angliiskie literaturnye sviazi (XVIII vek-pervaia polovina XIX veka), I iteraturnoe nasledstvo, XCI* (Moscow, 1982), pp. 480-487 を参照。
- 3) Anthony Cross, *Anglo-Russica* (Oxford & Providence, 1993), pp. 222-244 を参照。
- 4) Alekssev, *op.cit.*, p. 479. 作家 T. メドウィンによる描写。
- 5) クレアとロシアとの関係については次の拙稿を参照。「バイロンおよびクレアモントとロシア」(静岡県高等学校英語研究会『静英研会誌』第29号, 1991年); 「トーマス・ムアおよびジョージ・ボロウとロシア」(同第30号, 1992年)。なお本稿には上記拙稿と重複する部分が若干ある。

- 6) Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 123.
- 7) *Ibid.*, p. 92; Stocking, *op.cit.*, p. 298.
- 8) Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 92.
- 9) *Ibid.*, p. 120.
- 10) *Ibid.*, pp. 116-117.
- 11) *Ibid.*, p. 116.
- 12) *Ibid.*, p. 117. メアリ・シェリー宛手紙。
- 13) Cross, *Engraved in the Memory*, p. 166.
- 14) Stocking, *op.cit.*, p. 324; Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 97.
- 15) Stocking, *op.cit.*, p. 318; Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 97.
- 16) Cross, *op.cit.*, p. 160.
- 17) Stocking, *op.cit.*, p. 306; Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 95.
- 18) Stocking, *op.cit.*, p. 393.
- 19) *Ibid.*, p. 394.
- 20) Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 111.
- 21) Stockings, *op.cit.*, p. 388.
- 22) Alekseev, *op.cit.*, pp. 511-518 を参照。
- 23) Stocking, *op.cit.*, p. 422; Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 112.
- 24) Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 119.
- 25) Stocking, *op.cit.*, p. 403.
- 26) *Ibid.*, pp. 409-410.
- 27) Alekseev, *op.cit.*, pp. 498-506 を参照。
- 28) Stocking, *op.cit.*, p. 325.
- 29) Alekseev, *op.cit.*, pp. 507-511; Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 109 を参照。

III

- 1) Alekseev, *op.cit.*, p. 595.
- 2) Cross, *Anglo-Russica*, p. 210.
- 3) *Ibid.*, p. 211.
- 4) Alekseev, *op.cit.*, p. 602.
- 5) *Ibid.*, p. 601; Cross, *op.cit.*, p. 212.
- 6) ポローとロシアとの関係については本稿注II 5)に記載の拙稿「トーマス・ムアおよびジョージ・ボロウとロシア」を参照。
- 7) Cross, *op.cit.*, p. 215.
- 8) Alekseev, *op.cit.*, p. 628.
- 9) *Ibid.*, p. 630.
- 10) *Ibid.*, p. 616.
- 11) *Loc.cit.*
- 12) *Ibid.*, p. 618.
- 13) *Ibid.*, p. 634.
- 14) *Ibid.*, p. 630.
- 15) Cross, *op.cit.*, p. 220.
- 16) Cross, *op.cit.*, pp. 219-220; Alekseev, *op.cit.*, pp. 650-651 を参照。
- 17) イギリスとロシアの文化交流を扱ったわが国における最新の研究として、今井義夫「イギリスとロシア—19世紀ロシアにおけるディケンズ文学と協同組合思想の影響をめぐって—」(『ユーラシア研究』第3号, 1994年)がある。
- 18) クレアによって義父ゴドウィンに伝えられたロシア情報が、彼の小説 *CLOUDESLEY* に反映している、との主張がある。Gittings and Manton, *op.cit.*, p. 92 を参照。
- 19) 当時のロシア貴族の演劇愛好ぶりを紹介したわが国における最新の研究として、矢沢英一「シエレメーチェフの農奴劇場」(『ロシア手帖』第38号, 1994年)がある。